

# 話し合いの積み重ねで、ボランティア・市民活動団体の「協働」のあり方を探る

宝塚市社会福祉協議会  
ボランティア活動センター  
兵庫県宝塚市  
<http://homepage1.nifty.com/takarazukashakyo/>

## 話し合いの積み重ねが「協働」につながる…「ワーキングチーム」で検討

宝塚では阪神・淡路大震災以降、様々な分野や活動形態のV・市民活動グループ、団体が数多く誕生している。そのような中、従来から市社協V活動センターが行ってきた「登録制度」「助成事業」などの支援の仕組みでは、多彩で幅広い市民の活動への対応がしきれなくなっていた。また、市内にはV・市民活動の支援組織が複数ありましたが、これら支援機関間の連携はあまり活発とはいえなかった。

そこで、V活動センターのこれからの活動支援策を原点から見直すために、ボランティア活動センター運営委員会に「ワーキングチーム」を設置し、話し合いを進めてきた。

## 異なる意見を出し合い、時間をかけて違いや多様性を認め合う

「ワーキングチーム」のメンバーは、Vグループや個人などの活動主体と、ネットワーク組織、中間支援組織といった多彩な構成になっている。それぞれが、ボランティア活動センターに抱く「思い・目的」「役割・機能」のすり合わせが必要で、議論はなかなか進まなかった。しかし、議論が活動の実態と遊離しないように進めることは大変重要なため、検討内容はタイムリーに情報公開された。

また、実際の活動者との意見交換の場として、市民にも参加を呼びかけ、「ボランティアを考えるフォーラム」を夏・冬の2回、開催した。夏の「フォーラム」では、V活動実践者ひとり一人が「多様な価値観を認め合う」「当事者の生活の視点に立つ」ことへの気付きを得ることを狙いとし、冬の「フォーラム」では、「助成金」のあり方をテーマに、V活動団体の自立の意味について問い直す契機とした。これら2回の「フォーラム」を通じて、中間支援組織として様々な話し合いの場を提供することの大切さが認識された。

## 「協働」を進める中で見えてきた、社協ボランティアセンターの役割

これらの取り組みを進める中で、V活動センターはその公共性を活かし、地域で多彩・柔軟な活動を進めるNPO・市民活動団体との連携・協働をさらに進める必要性があると分かった。今後もV・市民活動に参加する多様な団体や人々が議論する場を提供しながら、暮らしやすい地域づくりに向けたV活動センターのあり方を検討する予定。

# 地域の「パワー」をつなぐ協働活動

### くらしの場を支えるしくみづくり

平成15年度  
インフォーマルサービス  
協働システム  
調査研究委員会  
報告より



「ワーキングチーム」構成団体  
学識経験者／宝塚ボランティア連絡会／宝塚NPOセンター／宝塚市社協ボランティア活動センター運営委員会／宝塚市社協／その他宝塚市社協ボランティア活動センターの建物を管理する財団、利用者運営委員会の代表が参加

協働とは、異なる立場や特徴を持った人々・団体が、互いに対等な立場で、それぞれの特徴を活かしあいながら、ともに何かを創り出していくことです。異なる種・異分野の組織・事業所等が参加することで、新たな発想やアイデアが生まれます。また、業務や組織活動を通じてまちづくりに参加でき、多様な人や資源を効果的に活かすことができます。全国社会福祉協議会において行った調査研究事業の成果をもとに、2つの事例を紹介し、協働の進め方やポイントをまとめました。



特定非営利活動法人  
ゆうあんどあい  
宮城県仙台市

<http://www10.ocn.ne.jp/~youandi/top.htm>

# 地域のつながりで支えあいのしくみづくり

## 助け合いの地図づくりを通して、安心して暮らせるしくみづくりをめざす

仙台駅から2kmほど離れた宮城野区原町（はらのまち）、ここで特定非営利活動法人ゆうあんどあい是在宅介護支援を行ってきたが、日々の活動の中で地域での支えあいのしくみづくりや地域資源との連携の必要性を痛感していた。そんな中で、ゆうあんどあいと仙台市社協、宮城野区社協が中心となって「原町を安心して暮らせる町にするために」をテーマに協働事業を立ち上げた。

事業に参加したのは、中心の3団体の他、地区社協、地区民児協など5団体とVコーディネーターなどの個人で、合わせて9名による事業推進委員連絡会議が発足した。連絡会議では、座談会ワークショップ形式でワーキング活動を3回実施した。参加者が相互に交流を深めつつ、地域の資源や地域住民のニーズ等を整理し、ボランティア・市民活動を支援するうえでの課題の共有化を図った。その成果として、生活を支える多様な役割を果たしている人・施設・場所・しくみなどの情報を「助け合いの地図」として作成し、地域の情報をわかりやすく住民に提供するとともに、それぞれの機関・団体等の活動を知ってもらうことをめざした。

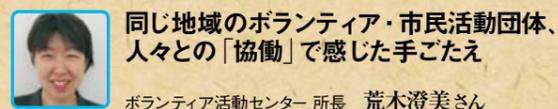
## 助け合いの地図づくりの先にあるもの

連絡会議の事務局は、仙台市社協、宮城野区社協、ゆうあんどあいが担当したが、最初に心がけたのは、主体となるゆうあんどあいの活動について理解してもらうことだった。活動を続けてきたとはいえ、利用者以外の地域の人には知名度も低く、地域のボランティアや民生委員に浸透するところから始める必要があった。

そのうえで、地域の福祉活動を担っている団体に対し事務局から呼びかけを行い、協働事業の目的や意義を伝え、座談会ワークショップでの協議内容も発信して情報の共有化を図った。

機能する支えあいのまちづくりネットワークが動き出すには、一人の利用者にどんな人たちが関わっているのかをよく把握して、関わっている人同士がつながっていく必要がある。住民が安心して暮らし続けられるまちづくりをめざし、今後も、協働のしくみづくりを継続して模索していくことが求められている。

「事業推進委員連絡会議」構成団体  
ゆうあんどあい／仙台市社協／宮城野区社協／原町地区民生委員児童委員協議会／原町のVグループ／原町地区と鶴ヶ谷地区の地域福祉活動推進委員等、5団体と個人4名から構成



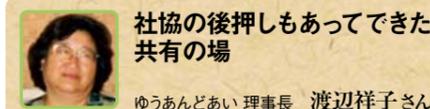
同じ地域のボランティア・市民活動団体、人々との「協働」で感じた手ごたえ

ボランティア活動センター 所長 荒木澄美さん

「ワーキングチーム」を核として、たくさんの人々が集まって議論をしていく時に、「各所属組織の文化の違いをまず認め合い、その上で、一致点や共通の課題を見出し、「決定事項や、未解決課題の共有など、話し合いや企画のスケジュールを明確にする」等、「協働」を進める上でのポイントとなる点をこの事業で学びました。議論の過程では話が行きつ戻りつすることもありましたが、宝塚のV・市民活動を発展させたいという「協働」の目的を共有することができたので、結果としては「必要な回り道」であったと思います。

また、この事業に取り組む中で、社協Vセンターが地域の中で置かれている位置が明確化し、展望を持って仕事に取り組めるようになりました。特に市民から支えられ、公共性のある社協Vセンターの課題としては、支援の対象をV活動実践者、生活課題を抱えた当事者のほかに、主婦や青年層、地域に居住する専門家、また今までV・市民活動に関わっていない人々にまで、活動への関心を持っていただく工夫をする必要があると感じています。

そのための活動プログラムの開発や情報提供の充実も必要です。そのため、参加する方々の顕在・潜在した問題意識を引き出し、新しい関係性の創設へとつながります。そして、この新しい「協働の関係」が、次の新たな「課題解決の場」となり、更に新たな関係性の創設へとつながる。というような、関わった方々が次々と元気になる協働連鎖のプログラムを用意していれば「おもしろい」と考えています。



社協の後押しもあってできた共有の場

ゆうあんどあい 理事長 渡辺祥子さん

ゆうあんどあいは平成4年以来、全ての人々が地域で安心して暮らしていけるよう支援活動を続け、平成11年には特定非営利活動法人格を取得しました。平成15年4月にデイサービスを始め、毎週月曜日には地域の人たちに世代間交流の場として開放しました。当初は地域の人になかなか来てもらえず、質の高い支援を行うためには地域と一緒にやっていかなければ、というのが協働事業に取り組んだきっかけです。ゆうあんどあいは会員の間ではともかく、地域ではまだまだ知られていませんので、協働事業は、お互いがまず知り合うこと、何を

団体かわかってもらうことから始めなければいけません。協働の場に私たちが出てこられたのは社協の後押しがあったからで、地域社会における社協の信用度にたすけられてのスタートとなりました。

事務局業務としては、ゆうあんどあいがレジメづくりや発送を担い、案内文や呼びかけは社協にやっていただくといった具合に分担はスムーズにできたと思います。

ワークショップの出席者は固定化してしまい、V活動者や一般の市民にあまり参加してもらえなかったのが残念です。しかし協働事業に取り組むことで、地域とのつながりが深くなり、若い母親や小学生が気軽にデイサービスに来てくれるようになったことは大きな収穫です。今回の事業は地元での私たちの活動のきっかけづくりになったと感じます。何らかの形でV活動をやりたい人は多いので、「ここでボランティアができる」と感じられれば参加してくれるようになると思います。

# めざすは地域の パワーアップ!

POWER UP!

～協働のポイント～

ボランティア・市民活動センターの課題の一つは、ますます多様化する市民による活動をいかに支援していくかということだといえます。ボランティアコーディネーターは、多様な関係機関・団体との協働によって市民活動を支援し、市民参画によるまちづくりの基盤をつくっていくことが重要となります。

多様な団体が共通の課題・目的のために「協働」するためのポイントをまとめるとともに、上野谷加代子氏(桃山学院大学教授/全社協・インフォーマルサービス協働システム調査研究委員会委員長)から、全国のボランティアコーディネーター及び応援者の皆さんに向けて、協働にむけた役割と期待についてコメントをいただきました。

## 「協働」の効果

- 協働の参加者は、ボランティア、住民参加型、NPO等、異なるミッションとルールで活動しています。参加者をしくみに押し込めるのではなく、「共通のルールやシステム」(プラットフォーム)に乗って協働することで、それぞれの活動を尊重し、自由な発想や新しいサービスにつなげることができます。
- 協働によって、それぞれがもっている以上のパワーが生まれ、単独ではできなかったことも実現することができます。また、自分の得意分野を持ち寄ることで、全体として大きなパワーに盛り上がります。
- 情報がオープンになり、共有化が図られます。そのことで協働活動の参加者・利用者双方が協働の効果を感じることができ、一層のパワーアップにつながります。
- 協働して行うプロセスの中に、単独の事業や活動では見えなかった喜びや発見があり、協働でやり遂げた達成感を参加者が共有することができます。こうした協働のおもしろさや楽しさ、パートナーシップが次の活動を生み出すエネルギーのもととなります。「体験し・共有し・実感する感動が次の意欲を引き出す」のです。

## 「協働」の4つのポイント

### 1. 「エリア」を考える

#### ①顔の見える範囲が基本

「協働」のエリアの基本は、「顔の見える範囲からもう少し広い範囲」が基本です。お互いがエネルギーを交換し合い、変化し

てイキイキとした関係をもてる範囲というイメージです。

#### ②エリアを限る場合、広げる場合

エリアを限定したり拡大した方がよい場合があります。例えば、まちづくりの活動では「まち」と考える範囲やより身近な地域の単位に限定したり、移動サービスなどでエリアをつなぎ合わせて移動できる範囲を拡大したりする場合です。

### 2. 協働の責任は参加者全てが担う

#### ①責任はみんなで担う体制が大切

それぞれの参加者が自らの力量に応じて責任を担うことが、協働のしくみをうまく働かせるコツです。

#### ②対等な責任と対等な発言

「協働を組む」という点において参加者は対等の責任を負い、対等に発言することが必要です。協働していくための「要項」「規約」などを形にしておくことも有効です。

#### ③相手と範囲を選ぶ

異なる考え方や立場で活動している組織・団体が、「協働を組む」ことができるのは限られた部分となります。協働には、「できることを持ち寄るおもしろさ」と「できないことを明らかにする厳しさ」があるのです。

#### ④義務の徹底と利用者への責任

協働を組むことにより、参加者が情報を共有することがあります。その場合、利用者に対する義務や責任についても、協働の参加者のなかで共有することを確認しておく必要があります。

### 3. 期間の点検

#### ①協働の期間は「目的の達成」度で考える

協働は永続させることが重要なではありません。協働には、その使命や協働で取り組む課題の解決、協働の目的の達成というゴールがあり、めざしたことがどのくらい達成できたか、が大切なのです。

#### ②期間を点検してみよう

一定期間の後に協働関係を見直すことは、関係に緊張感を与え、よりよい協働となるために有効です。

### 4. 新しいサービスを生み出す

#### ①協働から新しいサービスが生まれる

多様な人や団体が関わりあって協働する中で、新しいサービスを生み出す動きにつながる場合があります。地域での暮らしの場の支援として、必要なものを協働の中から新たに創りだす発想を大切にしましょう。

#### ②協働はまちづくりにつながる

協働の動きが、周囲の住民の力を掘り起こし、「思い」が行動につながり、まちづくりに発展していくこともあります。協働のしくみが、地域のパワーを引き出し、形を与えるしかけとなりうるのです。

## 新たなプラットフォームを創造するためのエネルギーを発揮して 上野谷 加代子氏



V活動は関係の産物です。Vコーディネーターのみなさんはたくさんの人と出会ってきた強みがありますから、それを発揮していただきたい。これからの地域福祉の時代はボランティア抜きに語れません。その新しい時代にボランティアがどう位置付けていくのか、とても楽しみです。自信を持って軸足を市民の側に置いてください。地域社会の中で、個人と個人、個人と団体、団体と団体の「手のつなぎ方」を伝えていってください。少し温度差があるとなかなか手をつなげない人が多いですから。その手法は既に持っているはず

で、それを使う時代になったことに気付いてください。Vコーディネーターがちょっと敏感になればいいんです。1+1は3、4、それ以上になります。みなさんがもひとつグレードアップすれば世界はびっくりするほど広がりますよ。

